

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

第9回 全国大会プログラム

日時 2009年11月14日(土) 10:00~17:30

場所 大東文化大学 大東文化会館
〒175-0083 東京都板橋区徳丸2丁目4番21号
TEL: 03(5399)7038 (内線8000)
(東武東上線 東武練馬駅北口 徒歩3分)

(ホール)

- ★総合司会 日本大学教授 原 公 章
- ★会長挨拶 (10:00~10:10) 南山大学名誉教授 荻 野 昌 利
- ★会場校挨拶 (10:10~10:20) 大東文化大学学長 渡 部 茂
- ★研究発表 (10:20~11:50)
- 第一室 (K-302) 司会 大阪ラスキン・モリスセンター館長 露 木 紀 夫
1. 『近代画家論』におけるRuskinの崇高 お茶の水女子大学大学院 照 井 和 子
司会 埼玉大学教授 宇 田 和 子
2. エイダ S. パリン——19世紀のカリスマ主婦 津田塾大学助教 山 本 淳 子
3. ビスケット・タウンの「クイーン」をめぐる人々
——ラスキン、メレディス、ワイルド 静岡産業大学准教授 岡 谷 慶 子
- 第二室 (K-404) 司会 愛知淑徳大学教授 平 林 美 都 子
1. "Goblin Market"におけるLizzieの内なる笑い 首都大学東京大学院 橋 川 寿 子
名古屋大学講師 松 浦 愛 子
2. ヴィクトリア朝地方劇場——文化産業の誕生 司会 東京家政大学教授 谷 田 恵 司
3. トロロープとアイルランド
——*The Macdermots of Ballycloran*の場合 桃山学院大学大学院 藤 居 亜 矢 子
- (K301)
- ★理事会 (12:00~12:50) 司会 大阪大学教授 玉 井 暲
- (ホール)
- ★特別講演 (13:00~14:00) 司会 法政大学教授 荒 川 裕 子
ヴィクトリア朝の中の〈日本〉
——コレクション、画中画、ジャポニスム 日本女子大学教授 馬 淵 明 子
- ★シンポジウム (14:20~16:50)
サブカルチャーとプリティッシュ・アイデンティティ
——ヴィクトリア朝再考 問題提起・司会進行 甲南大学教授 井野瀬久美恵
パネリスト 埼玉大学教授 市 橋 秀 夫
パネリスト 武庫川女子大学教授 藤 本 憲 一
パネリスト 甲南大学研究員 上 宮 真 紀
- ★総会 (17:00~17:30) 司会 福島大学教授 辻 み どり
- ★閉会の挨拶 (17:30~17:40) 元東京大学教授 富 士 川 義 之
- ★懇親会 (18:00~20:00) 大東文化大学板橋キャンパス内 カフェテリア「グリーンスポット」

【研究発表】

『近代画家論』における Ruskin の崇高

お茶の水女子大学大学院 照井 和子

Ruskin はモラル重視で保守的と見なされがちだが、『近代画家論』の中で彼の世界観はキリスト教的からモダニズム的世界観へと移行していく。作中に顕れた Burke の崇高についての Ruskin の理解、扱い方、その変化を辿ることで Ruskin のモダニズム性がどこで生じたのかを明らかにする。彼は統一性のある自然の中で神を「観照」し恍惚とした喜びの崇高を感知するが、未だ Burke 的崇高を理解できない。その後中世ゴシック期の芸術と出会いグロテスクを理解することで、「死を観照する心的状態に焦点を当て、そこから生じる崇高なグロテスク」を理解し動的エネルギーや現代的グロテスクを秘めた Burke 的崇高を理解する。崇高なグロテスク芸術は象徴主義的特性を持ち、観る者の不完全な認識故真実との間に「割れ目」を生じそこから多様な解釈、芸術が創出される事を彼は述べている。

エイダ S. バリン :19 世紀のカリスマ主婦

津田塾大学助教 山本 淳子

19 世紀には、工業化社会及び消費社会の進展により、専業主婦が大幅に増加し、人々の生活にも様々な変化がみられた。特に家を調えるための買い物や、それまで以上に重要な家事のひとつとなった。新しいモノが市場に出回るなか、時代に即しかつリスベクタビリティを保つための買い物には、母親や祖母から受継いだ知識では不十分であり、女性たちは新しいお手本を必要とした。このような傾向は、特に中産階級女性の間に顕著にみられた。

ロコミのほか、主に女性雑誌や家政本がお手本の役割を担ったと言われる。しかし、エリス夫人など執筆者たちが、実在のロール・モデルとして果たした役割が大きい。彼女たちは、現代でいうところの「カリスマ主婦」である。その中でも、19 世紀末、服装改革者や雑誌編集者、著者として知られたエイダ・S・バリンの活動をとりあげ、時代が要請した「カリスマ主婦」たちの存在意義とその背景を考察する。

ビスケット・タウンの「クイーン」をめぐる人々——ラスキン、メレディス、ワイルド

静岡産業大学准教授 岡谷 慶子

1870 年代にイギリスでは製菓業が一斉に産業化し、クエーカー教徒によって高級ビスケットのブランドが創設された。レディングの「ハントリー & パーマーズ」は世紀転換期には世界最大のビスケット会社であった。第 2 世代の経営者ウォルター・パーマーは下院議員となり準男爵の爵位を得た。彼はジョージ・メレディスのために薬用ビスケットを開発した。妻ジーンは地元の文人を週末自宅に招待した。オスカー・ワイルドとは家族ぐるみのつきあいで、晩年のメレディスは彼女をクイーンと慕った。数奇な生涯を送った一人娘グラディスはサラワク（現マレーシア）の白人ラジャ、ブルック家に嫁ぎ、クリスチャン・サイエンス、カトリックの果てはイスラム教に改宗し、映画会社を立ち上げたこともある。レディングのセレブリティのサロンはいかなる様子であったか。ジーン・パーマーの存在に注目する。

"Goblin Market" における Lizzie の内なる笑い

首都大学東京大学院 橋川 寿子

Christina Rossetti(1830-1894) の"Goblin Market"(1862) は、さまざまな視点からの解釈がなされている。"A Peep at the Goblins" という fairy tale は、作者が母から学んだ聖書に着想を得て書かれたものであろう。そこから宗教的アレゴリーとしての解釈がまず考えられる。また兄、Dante Gabriel がこの原題を"Goblin Market" に変え、挿絵を描いて出版した時、家父長制社会の女性の問題に重点を置くフェミニズム的解釈

の方向が生まれた。さらに最近ではイギリス帝国主義とモノ文化にジェンダーの解釈を加えたものなどもある。いずれの解釈方法をとっても、主体性の成立という共通したメカニズムが浮き上がってくる。本発表は最後にほくそえむ少女の笑いの中に、「見る主体」から「書く主体」へと形成されていく作者の姿を探ることを目的とする。ロゼッティの散文作品や Lewis Carroll の *Alice's Adventures in Wonderland* などにも触れながら、ヴィクトリア朝中期に活躍したロゼッティの代表作を再考したい。

ヴィクトリア朝地方劇場：文化産業の誕生

名古屋大学講師 松浦 愛子

ヴィクトリア朝後期、マンチェスターなどの地方都市では劇場が「文化産業」に変貌しつつあった。それまで地方劇場は、固有のパトロンによりささえられたサブ・カルチャーとして、広く地域社会に影響力を及ぼしていたが、著作権の発達に伴い、ロンドンで公演された作品をほぼ同一の内容で再現し上演する巡業が盛んに行われ、首都中心の均一な文化網に組み込まれる。

中央からの劇団の公演が頻発になるにつれ、地方劇場における役者と観客の関係が従来までの対話型（ダイアロジカル）なものから画一化された観劇に変容したことに注目し、地方劇場が文化産業（カルチュラル・インダストリー）に変容する様を当時の劇作家ディオーン・ブシコー（Dion Boucicault）の代表作コリーン・バーン（*The Colleen Bawn*）の地方公演を例に考察する。

トロローブとアイルランドー *The Macdermots of Ballycloran* の場合

桃山学院大学大学院 藤居 亜矢子

19世紀アイルランドに関わったイギリスの思想家の中には、アイルランドに対して共通した態度がみられる。彼らには、最初のうちアイルランドに理解と同情を示すものの、自治の機運が高まると一転してその機運を制止しようとする、謂わば、アイルランドへの相反する感情がみられた。彼らは、「文化の境界に位置する人物」（Foster）と言え、共通する特徴があった。この報告では、どのようにトロローブのアイルランド経験と行動パターンが作品に反映されているかを、*The Macdermots of Ballycloran* を中心に検討していきたい。

【特別講演】

ヴィクトリア朝のなかの〈日本〉——コレクション、画中画、ジャポニスム

日本女子大学教授 馬 淵 明子

ヴィクトリア朝の英国は、その後半にすっぽりと「ジャポニスム」の時代を包み込んでいる。日本の開国後おもに1860年代から西欧全域にわたって広まった日本文化の影響とその受容を「ジャポニスム」と呼ぶが、その様相は国（文化）によって相違がある。このことはそれぞれの国が日本という新しい「異国」をどのように見たか、異文化を取り入れることにどのような意味があったのか、という比較のサンプルとしても、極めて興味深い。

ここではフランス美術を専門としてきた立場から、フランスと比較して際立って見える英国の特徴を取り上げてみたい。それらは(1)日本美術品のコレクションの体系性、(2)「もの」を写実的に正確に描きとって、それを「画中画」として「記録」という態度、(3)ジャポニスムにおいて、フランスにおけるようなドラスティックな変革を拒否する保守的態度、などである。

以上の諸点において、フランスのケースと比較して、ヴィクトリア朝英国の特色を検証することで、今までなされてこなかった、各国のジャポニスムの比較、という視点の導入を提案できたら幸いである。

【シンポジウム】

サブカルチャーとブリティッシュ・アイデンティティ——ヴィクトリア朝再考

【問題提起・司会進行】 井野瀬久美恵 (甲南大学教授)

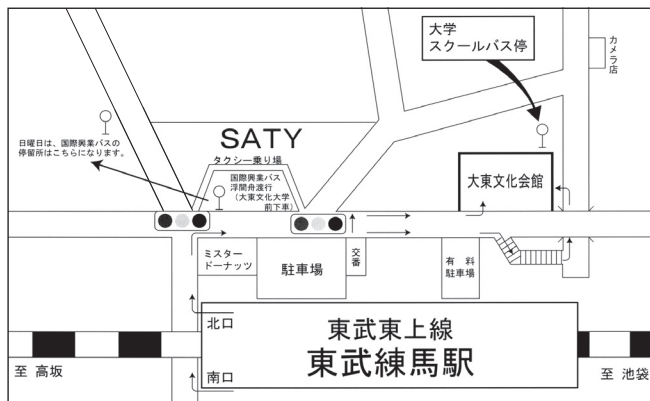
ヴィクトリア朝時代はダブル・スタンダードの時代でもあった。それは階級構造と深く関連するとともに、階級横断的な要素もまた強く有していた。だからこそ、当時のサブカルチャーは、「イギリス人であること (being British)」というナショナル・アイデンティティとしっかり結びつくことになったといえる。ミュージックホールしかり、ブラスバンドしかり。それは、20世紀、ビートルズ音楽などを通じて全世界に発信される1960年代のイギリス・ポップカルチャーとどのようにつながっているのだろうか。現在のブリティッシュ・アイデンティティをめぐる危機的状況は、ヴィクトリア朝のサブカルチャーが結びつけた「イギリス人であること」とどのように関連しているのか。そもそも、サブカルチャーを考えることは、ヴィクトリア朝をどう再考することになるのだろうか。そして、サブカルチャーに視点をおけば、ヴィクトリア朝と現代との関係性はどのように見えてくるのだろうか。

こうした問題を中心に、本シンポジウムでは、サブカルチャー論が活発に展開された1960年代、並びにサブカルチャーの発信に成功した現代日本における議論から、ヴィクトリア朝の文化の一端を逆照射してみたいと考えている。

【パネリスト】

- * 市橋秀夫 (埼玉大学教授) 1960年代に開花したポップカルチャーから、ヴィクトリア朝のサブカルチャーを見直す視点を提供する。
- * 藤本憲一 (武庫川女子大教授) 社会学の立場からサブカルチャー論の現在の展開を紹介し、ヴィクトリア朝のサブカルチャーを見直す視座を与える。
- * 上宮真紀 (甲南大学研究員) ヴィクトリア朝時代に生まれ、やがてブリティッシュ・アイデンティティの核ともなっていくブラスバンドを例に、「イギリスのサブカルチャー」の本質を探る。

大東文化会館周辺図



日本ヴィクトリア朝文化研究学会 (The Victorian Studies Society of Japan)

事務局：☎156-8550

東京都世田谷区桜上水 3-25-40
日本大学文理学部英文学研究室内
Tel/Fax: 03-5317-9709/9336
E-mail: victoria@chs.nihon-u.ac.jp